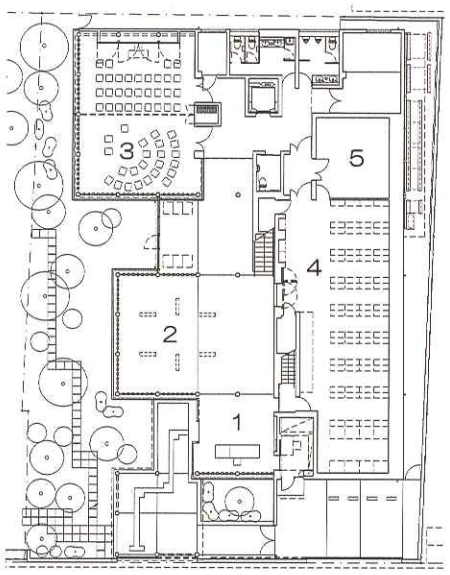
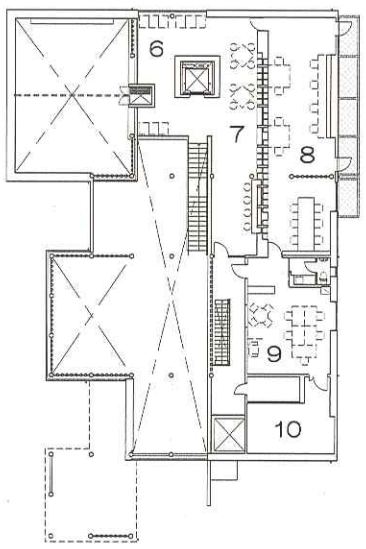
南方熊楠顕彰館

この施設は和歌山県出身の世界的博物学者である南方熊楠の研究資料を保存し、その偉業を研究・発信する事を目的として、公開式コンペによって選ばれたものである。
全体計画は熊楠が晩年まで過ごした南方邸と顕彰館の敷地を一体として捉え、顕彰館が邸の背景となるように、同時に邸そのものが顕彰館の収蔵展示物となるように配置し、邸に向かって開いた計画とした。また、周囲の町並みに溶け込むようなスケールとするために、大小の切妻屋根が連続する形態になっている。
建物は、地元紀州産の木材を構造材・仕上げ材として使用し、熊楠の活動の場でもあった熊野の森の大気を体現している。特に大屋根の構成材として桁、登梁等もあえて集成材を用いずに紀州材を使用する、と同時にテンション材・台風梁にスチール金物を使用し、素材の特性を生かしたハイブリットな構成により木材の美しさを強調している。
また、特記すべき事として木構造の耐力壁となる部分は、閉鎖的になりがちな一般的な工法を避け、日本の伝統工法である“貫壁”を新しい形で用いることで、格子状の耐力壁を構成し、内部空間と外部空間の視覚的連続性を確保すると共に、失われつつある伝統工法を新しい表現として伝承させている。
当初、面格子も検討されたが木痩せによってガタが生じ易く、その点を補うために追締めできる楔を用いた貫壁を応用することにした。木痩せは当然起こるので楔の追締めを定期におこなう必要がある。ならばそれを館のイベントとして地元住民から希望者を募ることで人々にこの建物に対する愛着を持ってもらえると同時に地域の活性化にも繋がると考えた。

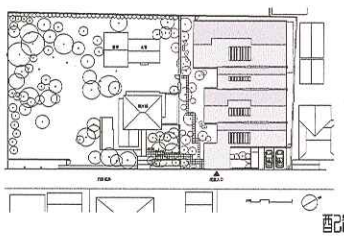


1 階平面図



2 階平面図

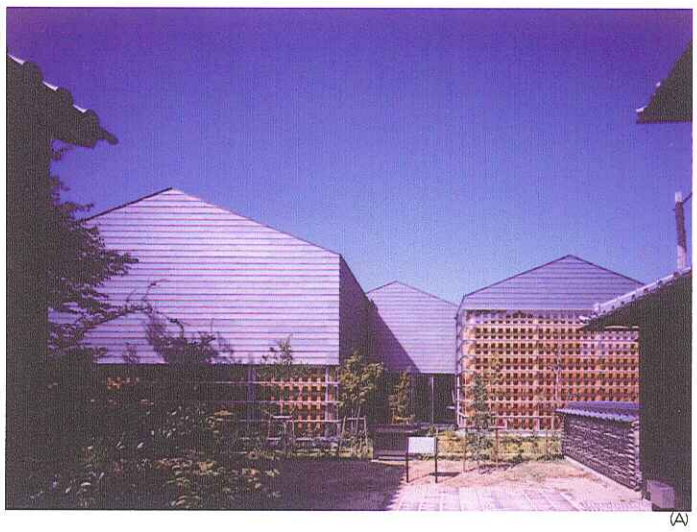
1. 玄関ホール
2. 展示スペース
3. 学習室
4. 収蔵庫
5. 機械室
6. 休憩コーナー
7. 交流・閲覧室
8. 研究作業室
9. 管理室
10. パソコン室


配置図

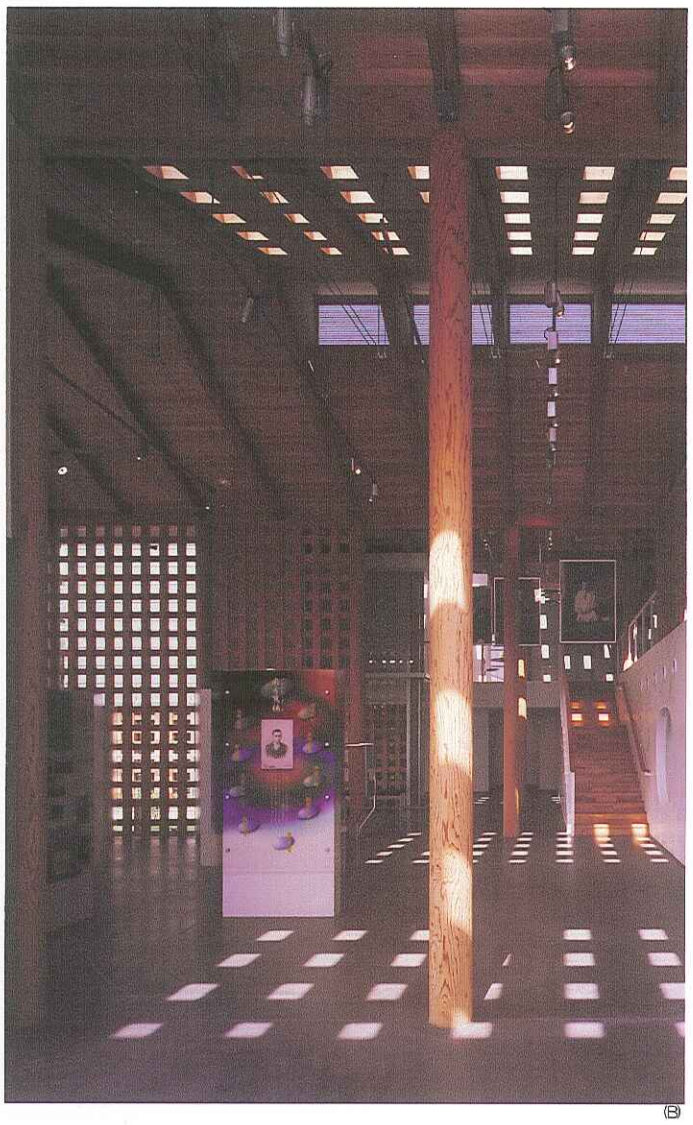
建物概要
構造・工法　木造、一部鉄筋コンクリート造
規模　地上２階
軒高：6.05 m
最高高さ：8.751 m

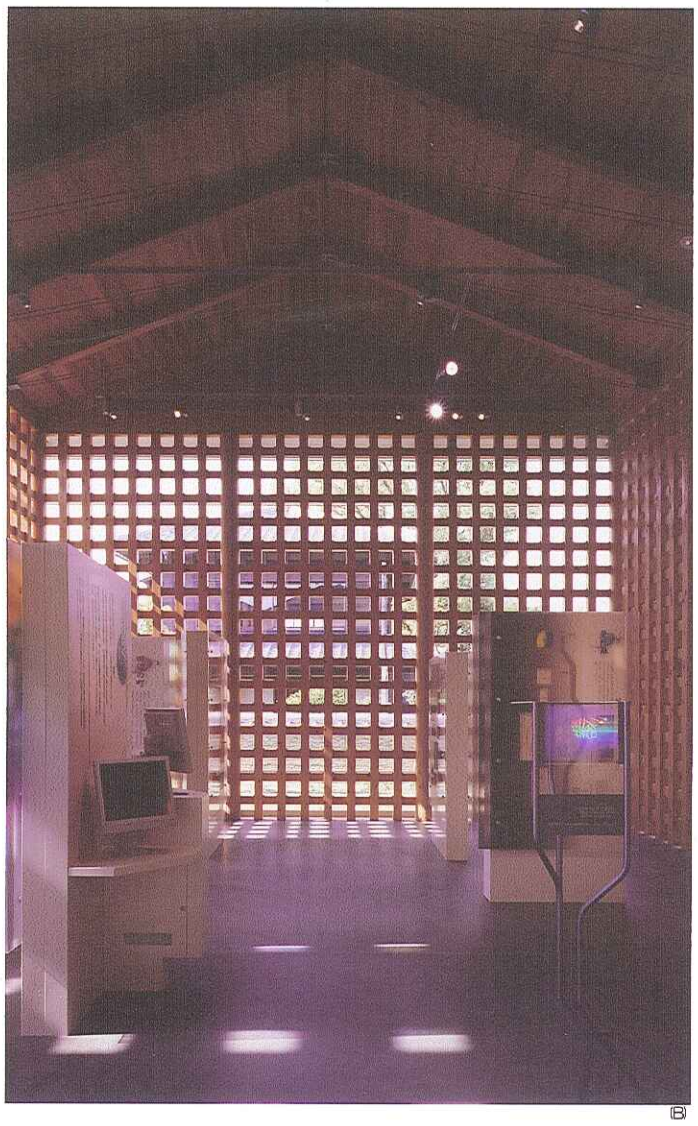
敷地面積	841.47 ㎡
建築面積	521.89 ㎡
延床面積	733.04 ㎡
１階床面積	483.29 ㎡
２階床面積	249.75 ㎡

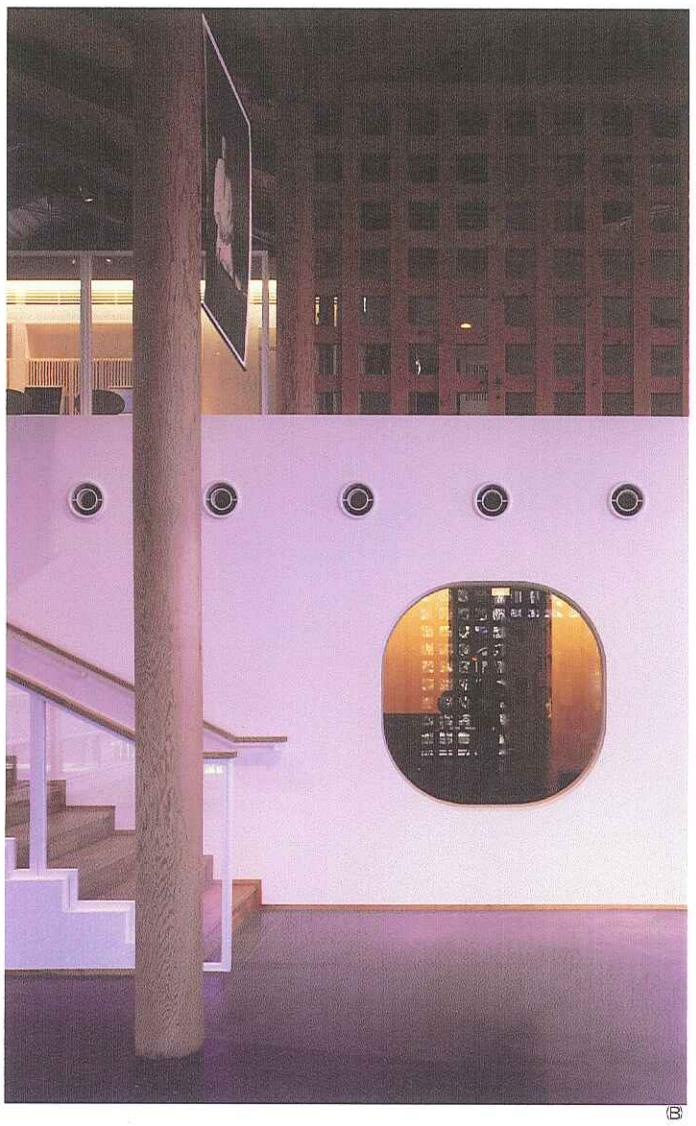
(B)


(A)

(B)

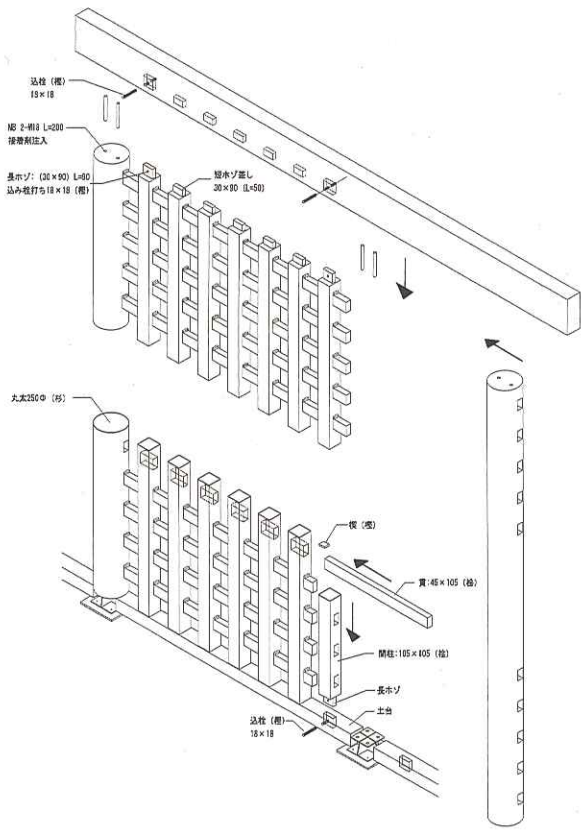

(B)


(B)


(B)

1. 玄関ホール
2. 展示スペース
3. 学習室
4. 収蔵庫
5. 機械室
6. 休憩コーナー
7. 交流・閲覧室
8. 研究作業室
9. 管理室
10. パソコン室

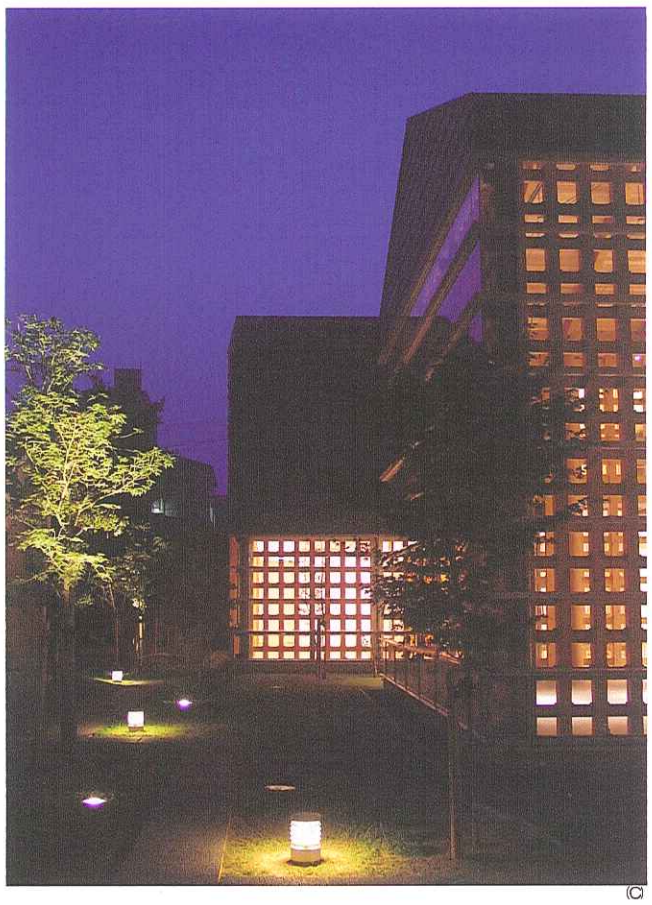
841.47 ㎡
521.89 ㎡
733.04 ㎡
積 483.29 ㎡
積 249.75 ㎡

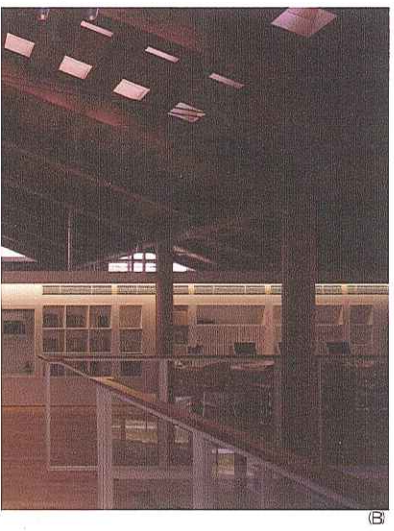


貫格子壁について

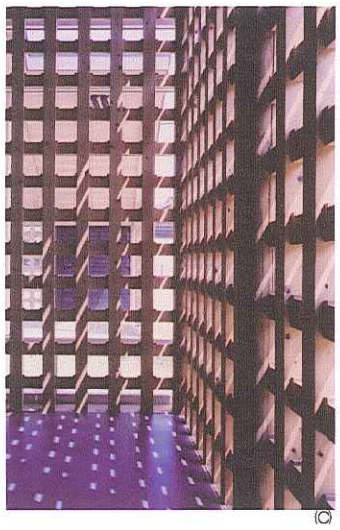
貫工法は、大陸から伝わった木造架構の断面寸法を小さくするために日本で考案されたものである。古くは塗り壁の中に埋め込むことで柱や梁のサイズを日本的スケールに抑えることに用いられた。日本の木造建築の歴史に重要な役割を果たした伝統的工法である。

今回考案された「貫格子壁」は貫材のめり込み抵抗を利用した工法である。2.47m ピッチの柱間の壁を約30cm ピッチの間柱と貫を格子状に組むことで、これまでの構造の耐震壁のように他の化粧材によって覆い隠されていた部分がデザイン性の高い、意匠の素材として建物の内外部に露わしの形で組み入れられている。当初、面格子も検討されたが木痩せによってガタが生じ易いのでその点を補うために伝統的工法である貫を応用することで追締めできる楔を用い、その難点を補っている。壁の変形能力は構造用合板の約2倍、層間変形角は1／15以上あり、耐震性に優れている。
また、金物を使用しない格子状の貫壁工法を取り入れることにより、構法的にも、意匠的にも失われつつある日本の伝統工法を、現代の技術と融合した先駆的技術として再評価しようとしている。


(C)

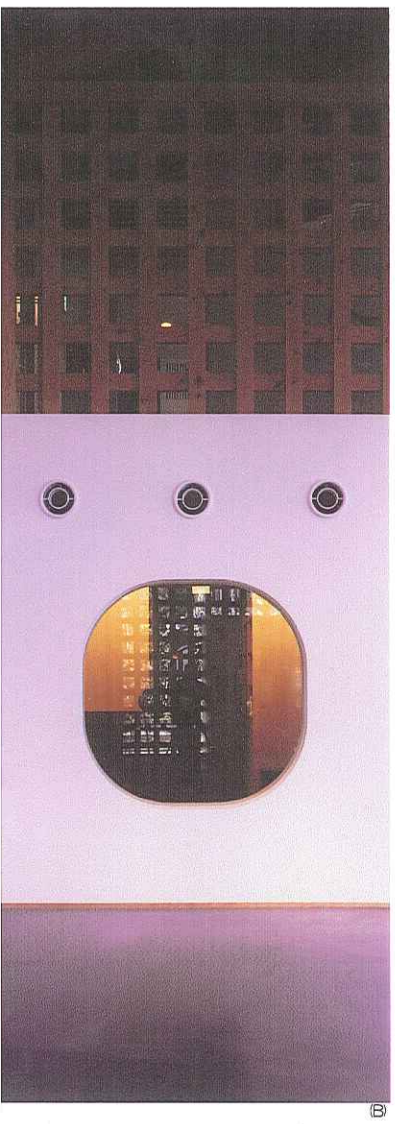

(B)

(B)


(C)

(C)

(C)


(B)

(B)

Photo Credit (A) : shinkenchiku-sha (B) : Yoshio Takase (C) : Yasuyori Yada